

2011/11/03(thu) - 11/20 (sun)

箱についての話。ギリシャの神ゼウスがパンドラに与えた箱には、あらゆる禍が封じ込められていた。好奇心に満ちたパンドラは禁を破って蓋を開け、人間界に不幸が飛び出した。パンドラが慌てて蓋を閉じたため、箱の底に希望だけが残ったという。現代美術家の河口龍生の《DARK BOX》は、太いボルトで封印された重厚な鉄の箱だ。「闇の箱」の題名通り、箱の封印は暗黒の中で行われる。ある日ある時の闇が、そこには閉じ込められている。

箱は何かを閉じ込める。パンドラの箱に閉じ込められた希望、《DARK BOX》に封印された闇を想像してみる。パンドラが箱を閉じた瞬間、希望は漆黒の闇に包まれただろう。もはや闇の向こう側、仕切りを隔てた箱の外側に光があることすら、希望には思い描けまい。《DARK BOX》のボルトが外された途端、内部の闇は消滅する。再び暗闇の中で箱を閉じても、そこに閉じ込められるのは別の闇だ。箱は何かを閉じ込めるだけでなく、特定の空間を切り取る機能も果たす。仕切り 1 枚を隔てるだけで、内側と外側の世界は何と異なることか、希望にとって、暗闇にとって。箱はつまり、その大小に関わらず、無限の空間と時間を生み出す装置でもあるのだ。

改めて、横山涼の箱を眺めてみる。闇を閉じ込めるほどの気密性はないようだ。外壁には「Death」という書き込みや骸骨のイメージもあるから、中に希望が鎮座しているとも考え難い。では字義どおり死や禍がパンドラの箱よろしく封じ込まれているのだろうか。いや、狡猾な死や禍なら、この箱のわずかな隙間からでも人間界にはみ出してくるに違いない。しかし、どの箱にも不釣り合いなほど頑丈な鍵と蝶番が付き、箱を補強する板や木片が、ボルトやビスで執拗に打ち付けられている。であれば、何かとんでもないものが中に潜んでいるのかもしれない。少なくとも、彼がこの箱のことを考え、制作に没頭した濃密な時間と熱量が閉じ込められていることだけは間違いない。再び、箱の中の熱と時間を想像してみる。それは確かにとんでもないことだ。なぜなら、果てしない時間と空間の広がりや横山と共有できるかもしれないのだから。 服部正（兵庫県立美術館）

